

我が国におけるボランティア活動について

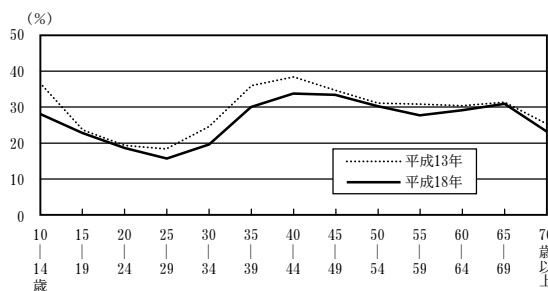
調査研究第二部 濱田 健司

1. ボランティア活動を行った人 ～働き盛りの世代で減少～

1年間にボランティア活動を行った人の数は、平成18年では2,972万人となっており、日本人の4人に1人が、なんらかのボランティアを行っている。

平成13年は3,263万人であったことから比べると、8.9ポイント減少している（行動者率（＝行動者数÷人口×100）では、28.9%が26.2%へ減少）。図1にみられるように、特に、減少率が顕著なのは、10～14歳、25～44歳までの世代で大きくなっている。20代、30代、40代は働き盛りの世代であり（表1参照）、日々、長時間就業に携わっている世代である。この世代は、近年、労働負担が増しているといわれ、ボランティア活動を行うことが難しくなっていると考えられる（図2参照）。バブル崩壊後、非正規雇用がすすむなか、正規雇用者への労働負担、仕事上の責任が増しており、そうしたなかでは、正規雇用者のボランティアへの参加は難しいといえるだろう。

図1. 年齢階級別「ボランティア活動」の行動者率



資料：「社会生活基本統計」より引用

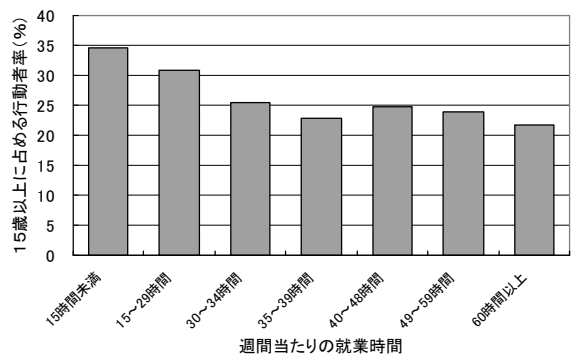
表1. 年齢別の週間就業時間

単位：時間

男女年齢	仕事
総数	224
10～14歳	0
15～19歳	53
20～24歳	277
25～29歳	339
30～34歳	315
35～39歳	319
40～44歳	338
45～49歳	333
50～54歳	322
55～59歳	288
60～64歳	191
65～69歳	128
70～74歳	83
75～79歳	53
80～84歳	34
85歳以上	15

資料：「社会生活基本統計」より作成

図2. 週間就業時間別のボランティア行動者率（15歳以上）

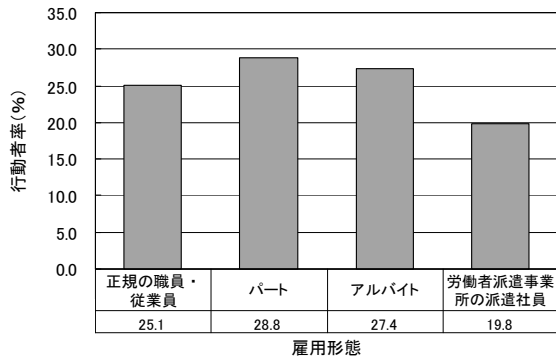


資料：「社会生活基本統計」より作成

派遣労働等の非正規雇用者についても、低賃金下での長時間労働に従事していることなどから、ボランティアへの参加は少なくなっ

ていると考えられる（図3参照）。

図3. 雇用形態別ボランティア活動者の割合（15歳以上）



資料：「社会生活基本統計」より作成

ただし、男女別でみると、男性では、「正規の職員・従業員」が24.3%、「正規の職員・従業員以外」が20.6%となり、女性では、「正規の職員・従業員」が25.0%、「正規の職員・従業員以外」が27.9%となっている。男性と女性では反対の傾向を示しており、女性は非正規雇用者の方が多くボランティア活動に参加している。詳細については後述するが、これは、子供をもつ、パートなどを行う主婦による、「子供」にかかわるボランティア活動への参加による影響と考えられる。

なお、平成13年から平成18年までの5年間では、30代、40代でのボランティア活動は大きく減少したが、全世代でみると、この世代はボランティア活動に比較的取り組んでいる世代である。

2. 男女のライフステージに応じたボランティア活動

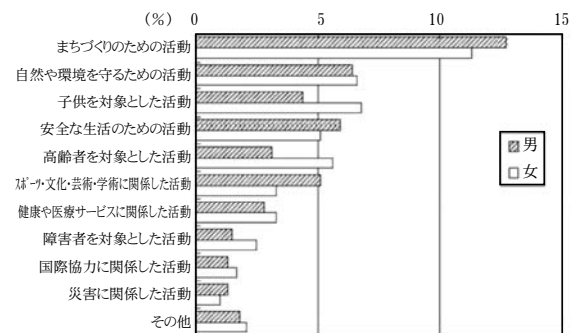
(1) 男性は「地域」対象、女性は「地域」「子供」対象

ボランティア活動の種類を男女別にみると（図4参照）、男性は第1位「まちづくりのため」、第2位「自然や環境を守るため」、第3位「安全な生活のため」等の活動が多く、女

性は第1位「まちづくりのため」、第2位「子供を対象」、第3位「自然や環境を守るため」等の活動が多い。

男性は主に地域づくりや地域での安全活動等の「地域」を対象、女性は主に「地域」「子供」を対象とした活動に参加していることがわかる。

図4. 男女、「ボランティア活動」の種類別行動者率

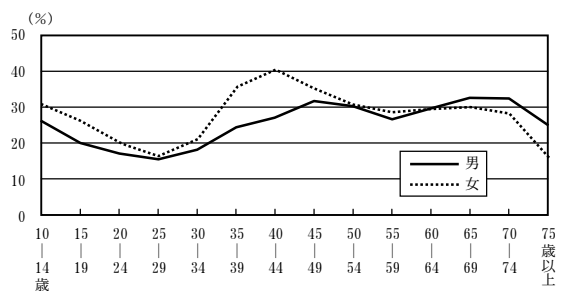


資料：「社会生活基本統計」より引用

(2) 男性は「子育て期」「高齢期」、女性は「子育て期」に参加

世代別でみると、女性は30～49歳に山があり、男性は40～54歳と60～74歳に山がある（図5参照）。

図5. 男女、年齢階級別「ボランティア活動」の行動者率



資料：「社会生活基本統計」より引用

30代、40代は、子育ての時代でもあり、「子供」にかかわるボランティア活動が多い（表3参照）。

夫は(表4参照)、子育て時、特に末子が小学生・中学生の時代、「子供を対象」にした活動が増加し、それ以降は減少する。

妻は、末子が就学前・小学生・中学生の時代、「子供を対象」「安全な生活のため」が増加し、その後は減少していく。ここでの妻の「子供を対象」「安全な生活のため」とした活動は、「子供」にかかわる活動といえる。また、妻は夫に比べ、比較的長い期間、「子供」にかかわる活動に参加していることがわかる。ここから女性の方が、子育ての主体となっている。

ることがうかがえる。

したがって、30代、40代でボランティアが多いのは(図1参照)、これらの世代(特に女性)が自らの子育てに関連する活動に参加するためである。

60代、70代前半の男性は、定年退職後の活動として、「まちづくりのため」「安全な生活のため」「自然や環境を守るため」といった「地域」を対象とした活動と「高齢者を対象」にした活動への参加割合(=行動者率)が高い。

表3. 男女の年齢階級別にみるボランティア活動種類

		単位: %										
性別	総数	健康や医療サービスに関係した活動	高齢者を対象とした活動	障害者を対象とした活動	子供を対象とした活動	スポーツ・文化・芸術・学術に関係した活動	まちづくりのための活動	安全な生活のための活動	自然や環境を守るための活動	災害に関係した活動	国際協力に関係した活動	その他
男性	総数	25.1	2.8	3.1	1.5	4.4	5.1	12.7	5.9	6.4	1.3	1.3
	10~14歳	25.9	0.2	3.5	1.7	2.9	2.7	14.9	3.4	9.9	0.7	1.3
	15~19歳	20.0	2.3	3.1	2.1	2.7	5.5	7.4	1.8	4.9	0.8	1.1
	20~24歳	17.1	3.8	1.6	1.9	3.3	4.8	4.0	1.8	3.3	0.6	0.9
	25~29歳	15.4	3.4	1.0	1.1	1.7	3.6	4.7	2.6	3.0	0.9	0.7
	30~34歳	18.0	3.4	1.0	0.8	2.4	3.6	7.4	3.8	3.0	0.9	1.4
	35~39歳	24.3	3.8	1.2	1.1	6.3	6.0	11.1	5.5	4.6	1.1	1.0
	40~44歳	26.9	3.5	1.3	0.9	7.7	6.6	13.2	6.6	6.2	1.4	0.9
	45~49歳	31.5	3.1	1.9	1.5	7.9	8.1	16.1	8.0	7.4	1.5	1.5
	50~54歳	29.9	2.6	2.3	1.6	5.0	6.8	16.6	8.2	8.0	1.7	1.8
	55~59歳	26.6	2.3	2.5	1.8	3.5	4.7	15.5	6.9	7.3	1.9	1.4
	60~64歳	29.3	2.2	4.4	1.9	4.2	5.3	17.0	8.5	8.1	1.7	1.4
	65~69歳	32.4	2.8	6.6	2.2	5.8	5.1	18.5	10.8	9.9	2.0	1.8
	70~74歳	32.2	2.2	7.4	2.1	5.5	4.7	18.7	9.1	9.2	1.8	1.6
	75歳以上	24.7	2.2	7.6	1.1	2.9	3.2	13.8	5.1	6.5	0.9	1.1
女性	総数	27.2	3.3	5.6	2.5	6.8	3.3	11.3	5.1	6.6	1.0	1.7
	10~14歳	30.7	0.4	5.9	2.6	4.3	3.0	15.7	3.6	12.6	0.8	1.8
	15~19歳	26.2	4.4	7.4	4.3	6.2	4.1	7.9	1.9	5.4	1.1	2.1
	20~24歳	20.3	5.5	4.3	3.8	5.6	3.7	2.6	1.1	2.7	0.4	1.5
	25~29歳	16.2	3.4	1.5	1.7	2.6	2.3	4.0	1.4	3.5	0.5	1.4
	30~34歳	21.3	3.4	1.9	1.3	7.1	2.2	7.2	3.8	4.9	0.9	1.1
	35~39歳	35.2	4.2	2.4	1.6	17.9	3.6	13.5	11.1	7.9	0.9	1.7
	40~44歳	40.5	3.7	2.6	2.6	20.8	5.5	15.7	14.2	9.8	1.2	2.7
	45~49歳	35.1	4.0	5.0	2.6	11.5	5.3	15.8	8.5	8.5	1.6	2.6
	50~54歳	30.4	3.3	5.9	2.6	5.1	3.7	15.0	5.7	8.1	1.5	2.0
	55~59歳	28.4	3.0	7.6	2.9	3.7	3.5	13.3	4.9	7.9	1.4	1.9
	60~64歳	28.4	3.2	9.4	3.1	3.9	3.6	13.6	4.8	7.4	1.2	1.7
	65~69歳	30.0	3.4	11.2	3.2	4.5	3.5	13.7	5.1	7.4	1.5	1.7
	70~74歳	28.0	3.3	9.9	2.8	3.5	3.3	13.4	4.0	6.3	0.9	1.6
	75歳以上	16.1	1.3	5.1	1.0	1.3	1.1	8.2	1.6	3.2	0.3	0.7

資料:「社会生活基本統計」より作成

表4. 夫婦の末子教育段階別にみるボランティア活動種類

		単位: %										
性別	総数	健康や医療サービスに関係した活動	高齢者を対象とした活動	障害者を対象とした活動	子供を対象とした活動	スポーツ・文化・芸術・学術に関係した活動	まちづくりのための活動	安全な生活のための活動	自然や環境を守るための活動	災害に関係した活動	国際協力に関係した活動	その他
夫	総数	29.3	3.1	2.2	1.4	7.0	6.6	15.3	7.8	7.1	1.6	1.3
	就学前	24.5	4.0	1.0	0.8	6.2	4.9	12.5	5.3	5.0	1.2	1.0
	小学	34.6	3.3	1.5	1.4	13.7	10.0	15.9	9.4	7.5	1.6	1.1
	中学	34.0	3.7	1.9	1.6	8.9	9.4	17.5	9.3	7.2	2.1	2.1
	高校	30.5	3.5	2.7	1.7	4.4	7.4	15.9	8.8	7.4	1.7	1.9
	その他	29.3	2.0	3.7	1.8	4.1	5.4	16.9	8.6	8.8	1.7	1.4
妻	総数	34.5	3.1	4.3	2.2	13.7	3.9	15.1	9.7	8.4	1.1	1.7
	就学前	27.6	2.4	1.5	0.9	13.2	2.1	11.1	7.3	6.5	0.7	1.3
	小学	52.5	4.1	3.2	2.4	34.0	6.7	20.9	22.4	12.1	1.1	2.1
	中学	41.2	3.8	4.2	2.5	17.5	5.2	18.5	12.6	10.1	1.4	2.4
	高校	34.1	4.6	4.4	3.7	7.5	5.3	16.0	7.1	8.1	1.7	1.9
	その他	29.6	2.7	7.5	2.9	4.0	3.3	14.4	5.0	7.8	1.2	1.5

資料:「社会生活基本統計」より作成

それに対し、女性は、高齢になるにしたがい、全体的に参加割合が低下する傾向にある。ただし、「まちづくり」に関しては、30代後半以降、一定割合が参加し、60代、70代前半では「高齢者を対象」とした活動への参加割合が高まる。

つまり、男性は「子育て期」および「高齢期」、女性は「子育て期」に積極的な参加を行っている。また、「高齢期」にはいると、男女とも地域での高齢者のための活動へ関与するようになっている。これは、地域等において「老老介護」等の高齢者が高齢者を支援、高齢者同士が助けあわなければならない状況を反映しているものと考えられる。

3. 地域別のボランティア活動

～都市地域では少なく、

農村地域では多い～

地域別でボランティア活動への参加割合をみると、東京、大阪、神奈川などで低くなっている。反対に、鳥取県は34.5%と最も高い。次に滋賀県および島根県が34.0%などとなっている。

都市階級別でみると(図7参照)、その傾向は一層明らかとなる。大きな都市になるほどボランティア活動が希薄化する傾向にあり、小さな都市および町村ではそれに比べ活発である。特に、「まちづくりのため」「自然や環境を守るため」「安全な生活のため」「高齢者を対象」では、小さな都市および町村での活動の方

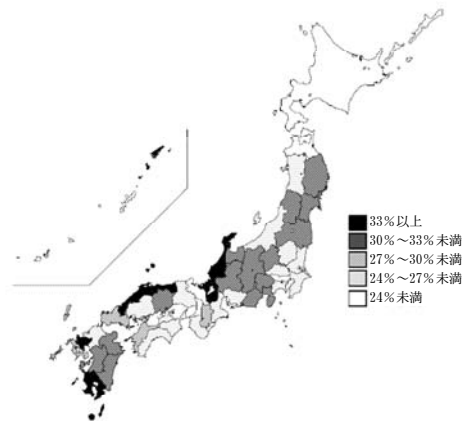
が、大きな都市に比べ高い割合で行われている。

これは、小さい町や農村地域ほど、高齢化や過疎化が進むなど、住民自らが高齢者対策や地域対策にとりくまなければならないということ、比較的既存のコミュニティが残っていることなどが反映していると考えられる。

4. 農協における社会貢献活動

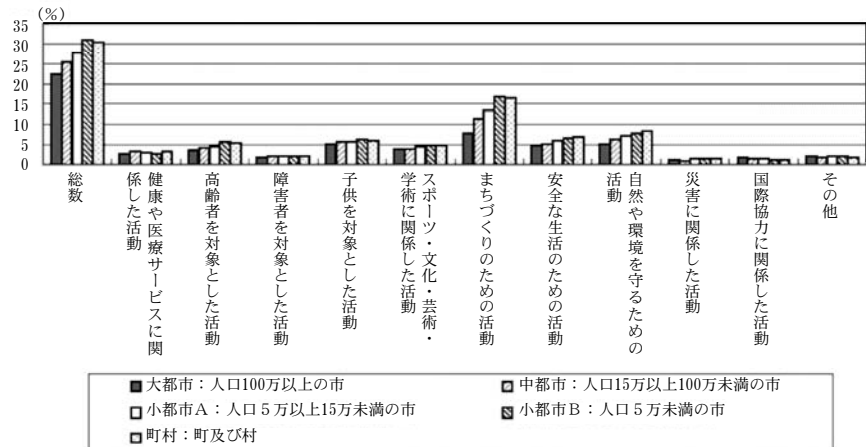
農協は「相互扶助」の精神にもとづいて、組合員農家の農業経営と生活を守り、よりよ

図6. 都道府県別、「ボランティア活動」の行動者率



資料：「社会生活基本統計」より引用

図7. 都市階級、「ボランティア活動」の種類別行動者率



資料：「社会生活基本統計」より引用

い地域社会を築くことを目的としてつくられた協同組合である。したがって、株主の配当等のために利益を追求する企業とは異なり、出資した組合員が組合の事業を利用することによって、自らの生産や生活を向上させるための組織である。

農協は、こうした「非営利」の社会貢献の精神にもとづいたさまざまな事業・活動に取り組んできた。

近年、地域のコミュニティ・セーフティネットが崩壊しつつあるなかで、農協は、農家や組合員だけでなく、広く地域住民のためのボランティア等の社会貢献活動に、これまで以上に取り組んでいくことが求められている。

その活動は次のように整理できる。

- ①「自主活動支援型」
- ②「組織実施型」
- ③「職員実施型」
- ④「組合員実施型」

①は、職員が実施する活動を農協が支援する「自主活動支援型」（例えば、ボランティア休暇制度整備、農協による参加費負担等）、②は、農協組織として物・資金・場などを提供する「組織実施型」（例えば、農協がイベント開催、活動資材の提供等）、③は、組織の一員として従業員が労働力・ノウハウを提供する「職員実施型」である（例えば、本所の周辺を職員が清掃・交通誘導等）。

このほか、④として、全中が「JA地域ボランティア

活動」の一つとして位置づける、構成員である組合員が組合員として自主的に実施する助けあい組織^{注)}等の「組合員実施型」活動がある。

これらの活動は、単協、事業連、関連団体等による取り組みに分けられる。

特に、農村地域では、これらの活動の果たす役割は大きくなっている。そうしたなかで、農協もこれまで以上に、地域の他組織、個人、行政、機関等との連携をはかり、「地域」を支える担い手、また支援する主体となっていくことが求められている。

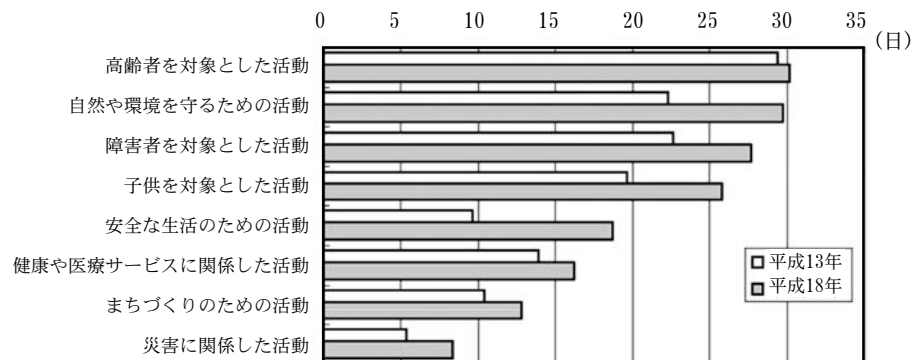
注) ④においては、特に、助けあい組織による活動は、自主的な組合員個人の活動としても位置づけることができるが、農協が意識的に、介護保険事業の施行に備え、組織化をはかった側面が強く、実質的な活動は農協の組合員としての組織活動に近い。

5. まとめにかえて

これまで、ライフステージに応じて、男女でそれぞれの活動を行ってきた。若い世代は子育てに関連した「子供」、「まちづくりのため」「安全な生活のため」「自然や環境を守るため」等の「地域」を対象としたもの、定年後の高齢世代は「地域」「高齢者」を対象としたものである。

時流の大きな変化のなかで、少子高齢化が

図8. 「ボランティア活動」の種類別平均行動日数



注：平成13年と比較可能な種類を表章。

資料：「社会生活基本統計」より引用

すすみ、コミュニティが崩壊しつつあり、財政難のなかで行政による福祉・医療等にかかる社会保障のセーフティネット機能が低下しつつある今日、より一層、「高齢者」「環境」「障害者」「子供」、つまり広義の「地域」を対象とした活動に取り組まざるを得ない状況になりつつある（図8参照）。

ボランティアとは、本来、「自主的」、「自己啓発」、「人類愛」といった理念のもとで取り組まれる活動である。対等な人間同士の関係において、自主的に、お互いが助けあい、豊かになるために活動するものである。

しかし、近年、行政の下請け的な「ボランティア」やそれにかかる「弱者同士」の「ボランティア」の活動が広がりつつある。いわば、「市場万能」「自己責任」「弱肉強食」の原理にもとづいた「資本主義化」によって、「社会的排除（ソーシャルエクスクルージョン）」された人々を、すくいあげていく「社会的包摂（ソーシャルインクルージョン）」活動としての側面がある。

こうしたなかでは、今後一層、国民への「ボランティア活動負担」が高まると考えられる。現在、NPO等への指定管理者制度の請負増加、民生委員などへの作業負担増加など、さまざまな形で、地域住民が行政、さらには既存のコミュニティにかかわって、安価な報酬あるいは「ボランティア」等により取り組むこととなっている。

本来、「社会的排除」を解決するためには、そうした状況をつくり出してきた、基本的な社会構造および経済構造を改革していくことが必要である。また、そうした取り組みのなかにおいて、「社会的包摂」にかかるボランティア活動に取り組んでいくことが重要となる。

ボランティア活動は、さまざまな関係者が「自己をより豊かにするために」「社会のために」取り組む活動である。単なる行政サー

ビス、既存コミュニティ活動の代替ではない。ボランティアを実施する側、受ける側にとっても、「楽しく」「無理のない」「負担にならない」活動であることが重要である。

したがって、もし、個人が、これからはじめて、ボランティア活動に取り組もうとするならば、身近なところで、できる範囲で、そしてその取り組みを通じてなんらかの満足感・感動等を得ることが出来る活動を行っていくことが重要であろう。例えば、「アパートの階段の上り下りで、困っている人を助ける」「電車で体の不自由な人に席を譲る」「道路の小さなゴミを拾う」「一人暮らしの高齢者のゴミ出しを行う」など、身の回りにいる身近な自分以外の人々のためになる小さな活動からスタートしてはどうであろうか。

こうした継続的な小さな取り組みの積み重ねが、点から線となり、さらに面となる。その結果、地域、日本、そして世界を豊かにしていくことにつながっていくのではないだろうか。

相互依存性を基盤とした本来の社会において、身近な「窓」を開けば、世界のどこかの「窓」と間接的に、もしかしたら直接、つながるだろう。

だが、ボランティアとしてのかかわり方を選ぶということは自分自身をひ弱い立場に立たせることとなる。自分を出すということは、「他からの攻撃を受けやすくなる」（vulnerability）ことである。

しかし、小さな勇気を出すことができれば、いろいろな「窓」とつながり、日常では得ることが難しい感動という様々な形での「報酬」を得ることが出来るだろう。

<参考文献>

金子郁容「ボランティア もうひとつの情報社会」岩波新書